

乳 がん 検 診 (巡 回)

動 向

巡回検診の受診者数は県域では1,284名の増加であったが、横浜市では4,130名の減少となった。横浜市では13年10月よりマンモグラフィ検診が併用されることになり、対象者が50歳以上の偶数年となったために受診者が減少した(50歳以上の奇数年齢者は視触診も受診できない。50歳未満は従来どおり視触診のみの検診実施)。県域部では相模湖町が地元医師会で実施となり検診受託市町村は22市町村となった。

県域部の検診は当協会が事務局を引き受けている「乳がん集団検診協力医療機関連絡会(会長=渡辺弘・聖マリアンナ医科大学名誉教授)」の指導により遂行されている。同連絡会は「県成人病検診管理指導協議会乳がん分科会(会長=同上,事務局=県福祉部高齢者保健福祉課)」の指導のもとに運営されている。

横浜市より受託の検診は「横浜市乳がん検診協議会(会長=土屋周二・横浜市立大学名誉教授)」の指導のもと、市衛生局ならびに各保健所と協力して検診を実施している。

横浜市のマンモグラフィ検診は、市内でマンモグラフィ装置を有している医療機関で実施されており、集団検診においては、従来どおり視触診による検診を行い、50歳以上の偶数年齢者には市内のマンモグラフィ実施医療機関を紹介して、受診をしてもらうシステムとなっている。

なお、当協会は総合判定機関として、マンモグラフィの二重読影と総合判定業務を受託して、検診の精度管理向上の一翼を担っている。

結 果

受診者総数は県域では減少は止まりやや増加しているが、横浜市では大幅に減少している。県域では初診者がやや増加しているが、横浜市では初診者はむしろ増加しているのに再診者が減少している。これは横浜市で10月よりマンモグラフィ併用検診が50歳以上は偶数年齢に限定して発足したため毎年受診の再診者が受けられないためかも知れない。これは受診者の年齢分布が県域、横浜市共50歳以上が顕著に多いことよりの推察だが、初診者の増加はいろいろなプロパガンダの成果と考えたい。要精検率は横浜市ではマンモグラフィ併用検診がスタートしたためか1.4%も増加している。精検受診率は前年同様県域が横浜市に比べ再診者が10%近く低く、発見乳がん数は県域13人、0.08%、横浜市28人、0.19%に現れている。初診者の発見乳がん率は0.12%、0.53%といずれも高いのは当然だが、13年度

の特徴は若年者が県域、横浜市共多い点である。進行の早い若年者の検診は現在のところ視触診のみで、マンモグラフィあるいは超音波の導入はまだ先にならざるをえないので、自己触診の普及が最も経済的な可能な方法だが自己触診率は50%前後ある。最近アメリカの論文で自己触診の効果を否定する結果のものが新聞にて大きく報道されたが検診にマンモグラフィのみで視触診が行われていない人種も環境もことなるアメリカのものを、読者が鵠呑みにされると、自己触診の普及への努力が水泡に帰してしまう恐れがある。発見乳がんについては、ステージ以下が44%、以上が56%でT1以下、T2以上準じている。予後に最も関係するNは、今回よりnは用いられなくなったが、あまり差がなくN072%と前年度に比し悪くない。しかし13年度は10月よりマンモグラフィ併用検診がスタートしたため、前年度との比較は適切でない。今後県域に対しては新しく導入されたマンモグラフィX線撮影装置搭載検診車の活用による成果を期待したい。

表1 横浜市乳がん(28名)

1) 自覚症状・しこりと発見がんステージ

	ステージ					計
	Tis	0	I	II	III以上	
自覚症状有り			5	5	6	16
自覚症状無し	2		3	3	1	9
計	2		8	8	7	25

尚、両側乳がんが1件(, 期)
1件については調査用紙未返送 1件は受診状況不詳

表2 県域乳がん(13名)

1) 自覚症状・しこりとステージ

	ステージ					計
	Tis	0	I	II	III以上	
自覚症状有り			1	3		4
自覚症状無し			5	2		7
計			6	5		11

尚、2件については調査用紙未返送

表3 全域乳がん(41名)

1) 自覚症状・しこりと発見がんステージ

	ステージ					計
	Tis	0	I	II	III以上	
自覚症状有り			6	8	6	20
自覚症状無し	2		8	5	1	16
計	2		14	13	7	36

尚、両側乳がんが1件(, 期)
尚、3件については調査用紙未返送 1件は受診状況不詳

関係の集計表は125～128頁に掲載